
岩と鬼

くら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

岩と鬼

【Nコード】

N5780K

【作者名】

くら

【あらすじ】

いわが主人公の短編小説

あんまり大きな太陽だから、とトンボが弧を描いて着いた岩が硬く軋んだ、慌てて直線になって飛び去った。岩はひびの音に目が覚めた。

水流が長の年月摩し続け、段々に岩は欠け、圧力に負けて遂にはひびが入ったのではあったが、直接の引き金は先の大雨で水かさが増していたことであろう、川は、へ、へ、と苦笑して通り過ぎて行つた。まさか割れるとは思わなかったが、別にそれでどうと言つわけも無い。小さくなるのは残念だが、子が出来るとか自分の分身が出来るのだと思えばまずまず悪いことでもあるまい、さても不思議なのは眠っている間に小さくなった身体である。自分では大岩だと思ひ込んでいたのに、もう牛が二三丸まったら埋まってしまうような大きなのである。一体どれだけ寝ていたのか、と後悔した。

と、誰かが来て、お、割れそうだな、と言つた。岩は、うむ、それ、と答えた。

「どうも俺が知らないうちに水かさがまして、どんどん削られてしまったみたいだな」

「ふうむ」

仕様が無いのはどちらにもわかつていたが、何とはなしに青っぽい眼の色になつてしまった。それをからりと晴れさせて

「まあ、よかろう」

と言つ。

「うん。あんまり気にはしてないんだ。ま、そういうものさ」

「万事そうだね」

「こうやって生きてみると一つ気付くことがあるんだが、ものものがぶつかると言つことは『平らか』になると言つことじゃあないかと思うんだ。角がとれたり、でこぼこがなくなったり、動きが沈

んで行ったり、感情が均一になって行ったり、記憶が曖昧になって行ったり、知識に順序がなくなったり。なにこともほとんど平らになって行くような気がするんだな。俺の身体も多分そう言う過程のうちにあるんじゃないかと思うんだが」

「たしかに水によって丸くはなっているが、そう悲観することも無いよ」

「悲観しているんじゃないんだ。ただそう気付いたと言うだけのことで、よしんば悲観していたとしても俺はその悲しい事自体が世界の感情の全体だと思うだけで、いつそ世界中の全てと感情を共有できるような楽しみを思うね、どうかな、気取っていると思うかい？」

「いや、結構なことだと思うよ。しかし、感情と言うのは絶対の形を持っていないからあんまりはつきりとは言えないな。君がそう思う分には……ああ、もう割れるかなあ、どうもなんだか、そんな……まだしばらく持つかな？」

「どうかね」

「しかしさ、もし割れちゃったら、どっちが本体なんだい？ 割れて川に流れて行く方が本体？ それとも残ってる方が本体かな？」

「どちらも同じようなものだけど、あいにく脳みたいな適宜なものが無いのが無生物だからねえ、脳味噌のある方が本体だとは言えないのは厄介さ。小さい塊になったり、すなほどの大きさになって運ばれて行く粒子も自分じゃないとは言えないが、はつきりあれを自分だと言うには意志がきちんと繋がっていないし、なんともはや、曖昧だよ」

「じゃあ、君が欠けたところに新しくもとの形通りに鉄でも鑄着けたらどうかね、それは君のような感じがするかな？」

「そりゃそうだろうよ。一つの身体になるんだもの」

「でも、身体って何のことだい？ 別のものがくつついて、それで身体なのかな？ どうもそう言う感じがしないなあ、じゃあ隣にくつついているその石とか、ずっと着っぱなしの服とかも身体なのだろうか。そう言う感じはしないね。唯一身体と言えるのはそのもの

が自発的に作り上げた物質だけだよ」

「それを言うなら、こちららは圧力で固まっただけだから自発性はなんにも無いやね。勝手に理屈を作ってしまったのでもらいたいな。俺に取っては、くつついていさえすれば身体だし、そうそう、思い返せば、『元の形』なんてものもありはしないね。こりゃ、一種の迷妄よ、『元の形』、どうだね、なのことが俺にはわからんね」

「そうかもしれないな。君にとってはそうかも知れん」

「それにしても、あんたはこんなところでなにをしているんです？」

「こんなところ、ね。こんなところだからやらなきゃならないこともあるんですよ」

「というと」

「密猟だの過剰に狩猟をするやつらをひつとらえてるんですよ。毛の薄い皮は鞣すと綺麗になるんで、どうしても狩りが横行するんです。もう個体数がレッドゾーンでしてね、自然に増やすことが困難なんですよ。どうにか捕えて繁殖させないといけなくて」

「ふうん、大変だな」

「狩りは必要だけど、滅殺は言語道断ですよ。生物は多様化して色々な可能性を残して行つたのに、その可能性を無かったことにしてしまうなんてね、無思慮もいいところです。元は数が多かったんですよ、この地方に一杯居た、溢れるくらいにね。だからちよつと狩りをしたところで無くなりはいらないなんてやりはじめたらあつという間に絶滅しそうになってしまった」

「で、状況は？」

「ええ、もうあらかた保護しましたよ。あとは繁殖ばかりですが、繁殖期が一定でないので些か困難ですよ。それに保護から逃れた個体がまた狩られないようにしないと。必死にやってるんですけどねえ、人間の皮は高価で取引されてるから狙う者も多いんですよ」

「確かに他の動物に比べりゃ変わった皮なものな」

「もう少し安定したら牧場を作つて、繁殖させようかと思ってるんですよ。いい商売になると思っんですけどねえ、中々自然保護団体

の圧力とかあつて」

「まあ努力するんですな。でもいずれそれも潰れて平らになってしまいますよ」

「そうでしょうけど、それでもなんとかやっていくつもりですよ」

「そうだね」

岩が大きく鳴って裂けた。

その石の上にいた何とも言いえない誰かはひよつと何かを退かした。何かが何かに触れると岩に、やれやれ、そちらにも都合がありそうだから、そろそろ行くとしますよ。と言った。

岩は黙然としていた。

生き物が平らかになつて、その次は宇宙が平らかになるんだろう、と思った。

何と言う調和だろう。

岩はそれを口にしたが、もう返答は無かった。

随分と前に誰かは何かを伸ばし、何処かへ帰って行っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5780k/>

岩と鬼

2010年10月13日09時30分発行